

ヴァルター・ベンヤミン『複製技術の時代における芸術作品』

1～6 模造≠複製技術

芸術作品の歴史→芸術作品の一回性によってのみかたちづくられてきた

「ほんもの」の権威＝アウラ ←伝統・儀式性

複製技術時代→作品のもつ一回性は完全に消失、アウラはほろびてゆく

アウラの定義：どんなに近距離にあっても近づくことのでき
ないユニークな現象

7

19世紀 絵画と写真のあいだに抱く品の芸術的価値をめぐって論争がおきた

(それまでも写真が芸術か否か考察がなされてきたが、写真技術の発明によって芸術全体の性格が変わったかどうか、という問題はなおざりにされていた)

→この論争は世界的変革のあらわれであり、複製技術により芸術の礼拝的基盤が失われ芸術の自立性という幻影も永久に消え去った

8～11

舞台俳優の演技：生身で示される 俳優のアウラ

⇔

映画俳優の演技：器械装置をとおして示される 自己自身をさらけだすべき

俳優のアウラも劇中の人物のアウラも消滅

映画の観客：器械装置と同化することによってのみ俳優のなかに感情移入することができる 礼拝的価値を広げることのできないテストの姿勢

12

芸術作品の複製技術→芸術にたいする大衆の関係を変化させる

映画←集団による鑑賞 (映画館) : 進歩的な反応

絵画←ひとりないし少数人による鑑賞 : 保守的な反応

絵画の危機は写真によってのみひきおこされたのではない

写真とは無関係に芸術作品が大衆を求めはじめたことからひきおこされたのだ

13

映画の特徴：人間がカメラに向かって自己を表現するしかた

+カメラの力をかりて周囲の世界を表現するしかた

カメラに向かってくる自然≠肉眼に向かってくる自然

意識に浸透された空間のかわりに無意識に浸透された空間があらわれること
によって、自然の相が異なってくるのである

⇒われわれは、映画によってはじめて無意識的な厳格の世界を知ることになる

14

芸術のもっとも重要な課題のひとつ→その時代においてはまだ十分な満足を与えることができないようなあたらしい需要をつくりだすこと

芸術作品の魅惑的な外観・圧倒的な美しい響き→ダダイズムにおいて一発の銃声と化し、観客に命中し具体性を獲得→映画に対する需要を同時に助成

絵画(静)→観客・・・連想作用に没頭◎瞑想

映画(動)→観客・・・連想作用に没頭×中断 =ショック作用

ダダイズムが精神的な枠のなかに封じ込めていた生理的なショック作用を解放

15

芸術作品に対する大衆の態度：量が質に転化した

散漫な気晴らし(⇔集中)→(例)建築物：人間の集団が散漫に接してきた芸術
芸術が与えてくれる散漫な気晴らしを手がかりにすれば、知覚の新しい課題の解決がどの程度まで可能になったかを、吟味することができる

芸術が最も困難で重要な課題に立ち向かうのは、芸術が大衆を動員できる場所

=映画 観客：きわめて散漫な試験官 (審査員の姿勢だが集中不要)